＜投稿実践研究＞

鳥取大学医学図書館における公共図書館協力用図書の提供

—公共図書館との連携による学生・教職員への一般図書提供の試み—

津村　光洋*・大井津　明子*

Providing cooperation books of local public libraries
in Tottori University Medical Library

TSUMURA Mitsuhiro, OIZU Akiko

(*鳥取大学附属図書館)

キーワード：大学図書館，医学図書館，相互協力，地域連携
Keywords: university library, medical library, mutual cooperation, regional cooperation

1 協力用図書の概要

1）はじめに

鳥取大学附属図書館は平成14年12月より鳥取県立図書館と，また，鳥取大学附属図書館の医学部内にある分館，鳥取大学医学図書館は平成17年10月より米子市立図書館，平成18年5月より境港市民図書館，平成19年2月より南部町立図書館とそれぞれ相互協力協定を結んでいる。

この協定に基づき，鳥取大学医学図書館（以下医学図書館）では，4つの公共図書館と資料の相互利用，講演会・講習会の共同開催，OPACによる資料の横断検索などの連携事業を実施しているが[1]，その一環として，数百冊の一般教養書を一括借受けして学生・教職員の利用に供しており，これらの図書を協力用図書[2]と呼んでいる。大学図書館でこのようにまとまった図書の貸出しを公共図書館から受けているというケースは，著者らが調べた限りでは先行事例が見当たらず，公共図書館との連携の一形態として他大学ではほとんど行われていない珍しい試みといえる。

医学図書館での協力用図書の提供は平成16年度の途中に開始され，今年で5年目となる。本稿ではその業務の一部に携わっている当事者の立場から，この試みについて概要を報告し，これまでの利用記録をもとにその成果や問題点について若干の考察をしてみたい。

2）協力用図書開始の経緯

鳥取大学附属図書館および医学図書館が県内の公共図書館と締結した相互協力協定では，いずれも資料の相互貸借に関することが項目に挙げられている。鳥取県立図書館（以下県立図書館）では，従来から市町村立図

書館や高校図書館を対象に 300 冊の図書を貸出す協力用図書のサービスを，また，米子市立図書館も市内の学校図書館を対象に，図書をセット貸出しするサービスを実施していた。医学図書館では，外国雑誌や電子ジャーナルの高騰による深刻な資料費不足の状況の中，購入の余裕のない一般教養書や小説類を学生に提供するため，これと同様の形でまとまった冊数の本を借受けることにした[3]。

これら協力用図書の借受けは，平成 16 年 8 月にまず県立図書館との間で開始され，平成 17 年 10 月から米子市立図書館との間でも始められた。また，その後協定を結んだ境港市民図書館からは平成 18 年 5 月より，南部町立図書館からも平成 19 年 4 月より同様の形で本の借受けを行うことにした。借受け冊数は図書館の規模などを考慮し，県立図書館から 300 冊，米子市立図書館からは 100 冊，境港市民図書館と南部町立図書館からは 50 冊に設定し，3 ヶ月毎，年 4 回入れ替えを行っている。実際には相手館で利用中などのため届かない本もあり，平成 18 年度からの借受け状況は表 1 のようになっている。

3）協力用図書の運用

次に，協力用図書の運用について述べる。まず，県立図書館から借受ける資料の選定に当たっては，年度当初に長期貸出可能な図書資料のリストが先方から届けられる。このリストを医学図書館職員全員で回覧し，利用者に読んでもらいたい図書にチェックを入れていくという方法をとっている。選定した図書は県立図書館が契約している宅配業者の搬送車を利用して運ばれてくる。この搬送に伴う送料は，県立図書館側が負担している。搬送されてきた協力用図書は，県立図書館から借受けていることが利用者にも明らかになるようにカウンター横，情報検索用パソコンのコーナー手前の書架に別置して配架し，学外者を除く医学図書館利用者に 2 週間，1 回に 3 冊まで貸出している。

境港市立図書館・南部町立図書館の場合も，選書過程は県立図書館とほぼ同様であるが，米子市立図書館の場合は医学図書館から近いこともあり，医学図書館職員が出向き，書架に並んでいる図書を直接手にとって選書している。リストによる選書は書名・著者名等はわかるものの，自分の知識の範囲外の内容のものについては，想像して選んでいる状況である。それに比べ現物を見ながらの選書は，装丁・イラスト・写真等見て判断することができ，職員側に選ぶ楽しさもある。

協力用図書の貸出は，カウンターに設置したパソコンを利用し，エクセル表で利用者番号，資料番号，図書館名，貸出日，返却予定日，返却日を入力し，別途管理を行っている。

借受け図書の分野は小説・エッセイが中心で，その他，暮らし・生活に関する図書（料理・植物・手芸等），趣味に関する図書（釣り・キャンプ・描画・写真・旅行等），ビジネスに関する図書（情報整理・パソコン等）などをできるだけ偏りなく選書するようにしている。

2 協力用図書の利用統計から見えてくること

1）平成 17 年度から平成 20 年度までの利用冊数の推移

協力用図書の貸出記録をもとに作成した統計によると，平成 17 年度から平成 20 年 9 月までの月毎の利用冊数は表 2 のとおりである。

いずれの年も年度初めに比較的利用が多く，休暇期間の 8 月から 9 月にかけてやや減り，その後秋から冬にかけて持ち直してゆくというパターンになっている。年度末に貸出し冊数が減少するのは，入替えのため利用を停止することが大きな要因と考えられる。例えば，平成 19 年 3 月に利用人数・冊数が 0 となっているのは，

入替えのためまる一月間利用を停止していたことによる。年度末に限らず，図書の入替えの月には相当期間利用を停止する必要があり，その月は当然その分利用が少なくなっている。

また，4年の間に利用が毎年減少している様子が確認できる。その理由としては，はじめの頃は広報にも力を入れており，もの珍しさで借りてゆく利用者が多かったこと，また，公共図書館から提供を受ける本を選定する際に，どうしても最初に面白そうな本をまとめて選んでしまい，2回目，3回目と回を重ねる毎にその残りの中から選ぶため，だんだん面白そうな本が少なくなってゆくという事情などが考えられる。

なお，平成18年12月に貸出し冊数が急増し全期間を通じてのピークとなっている。これは，学内の事務局に週に1，2回職員一人が出向いて設置していた，図書館の出張所との関連が考えられる。この出張所は，図書館の改装工事のため平成18年春からサービスを中止し，11月から再開した。ここに持参した協力用図書を，多数の事務職員が借りたため大幅に冊数が伸びたものと考えられる。これは後で述べるように，協力用図書の利用者に事務・技術職員が多いことの表れでもある。

また，休暇中の8月には毎年利用が減っているのに，平成20年だけは利用が増加している。これは，やはり図書館の改装工事の関係で，協力用図書のコーナーの横が学生がよく通る通路となり，彼らの目につきやすくなった可能性が考えられる。もしそうであるならば，それまでの学生への周知が不十分であったということであり，広報の面で反省材料となろう。

2）借受け公共図書館ごとの利用状況

次に，平成18年度から平成20年度までの公共図書館ごとの利用状況を調べるため，借受け館ごとに該当年度の借受冊数を調べ，これをそれぞれの利用冊数で乗じて，図書の回転率を計算した。表3はその結果をまとめたものである。回転率は図書館ごと，年度ごとにかなりばらつきがあり，はっきりとした傾向は読み取りにくい。ただ，県立図書館の図書は回転率が比較的低いのに対して，南部町立図書館の図書が借受けを始めた平成19年に高い数字を示していることから，やはり新たに借受けを始めた図書館の本は人気が高く，時間が経つごとに回転率が低下することが推測される。なお，平成20年度の協力用図書全体の回転率は約0.35となっており，平均すると1冊の本が一度の入替え期間の間に約0.35回借りられているということになる。

3）比率の高い事務職員の利用

次に最新の平成20年の統計について検討したい。利用人数・冊数については，ともに平成19年に引き続き前年よりも減少しているという結果が出た。

試みに平成19年と20年の4月から9月までの協力用図書利用者の身分を調べた結果，表4のような結果となった。最も多いのは学生ではなく事務・技術職員で，ともに約半数を占めていた。事務・技術職員で協力用図書を多く利用するのは，定期的に文献を受取りにやってくる各教室の事務職員，そして先に述べた大学の事務局での出張所で本を借りる職員である。ところが，平成20年度からは，諸事情により出張所のサービスを全面的にとりやめることになり，出張所での貸出しがゼロとなった。これが，全体の貸出し冊数減に影響していることが予想される。実際に，平成19年の4月から9月の利用者の身分と平成20年のそれを比較すると，減少したかなりの割合が事務・技術職員であり，最も重要なサービス対象である学生の利用はそれほど変わっていないことが分かった。

4）学生の利用は保健学科・3年生が最多

次に，同じく表4の平成19年と20年の4月から9月の学生の学科ごとの利用状況を見てみると，合計の利用人数は両年とも保健学科が最も多かった。医学図書館は保健学科棟のすぐ隣で，保健学科の学生が最も足を運びやすい場所にあるのでこれは予想通りの結果といえる。また，入学年ごとの利用を調べた結果表5のように平成19年は4年生，平成20年は3年生の利用が最も多かった。理由として，3年・4年生が授業の準備や，試験勉強のため図書館によく通っているということ，保健学科3年生の全員を対象に毎年実施している利用講習の成果といった可能性が考えられる。

1年生については平成19年度は全員湖山キャンパスにいたので当然利用はなかったが，平成20年度からは医学科の学生が1年次から米子キャンパスに来ており，それにもかかわらず利用が0件というのは少しさみしい気がする。1年生には協力用図書の存在そのものが知られていない可能性もあるので，広報活動に力を入れる必要を感じた。

しかしながらこれらの統計から，協力用図書に関しては，年々減少傾向にありながらも継続的に学生・教職員による一定の利用があることが明らかになったといえる。

3 問題点と意義

1）協力用図書の問題点

最後に，協力用図書の問題点と意義について考えてみたい。

問題点としてまず，協力用図書を実施する際に，公共図書館の側には書庫などの資料が有効活用され，貸出し冊数の増加につながるなどのメリットが考えられるにせよ，基本的には大学図書館側が利益を受ける形にならざるを得ない点が挙げられる。図書館の相互利用は本来相互互恵的なものであるべきで，従って協力用図書の借受けは，公共図書館の側が大学図書館との連携により期待する，専門分野の資料提供やリファレンス，研究者等の人材の紹介などと合わせて考えられなければならず，こうした期待に大学側がどれだけ応えてゆけるかが実施のポイントになると思われる。

これまでの実績では，医学図書館が公共図書館からの要望で医学分野の資料を貸出したり，リファレンスに応じる件数は意外に少なく，年に数件程度であった[4]。この他，医学図書館では公共図書館との共催で年に数回の講演会を行っているが，その際に医学部の研究者を講師として招聘することに協力している。また，公共図書館の紹介で一般市民や医療関係者が来館することもあり，医学図書館側では，これらの業務の見返りとして協力用図書の実施が可能となっているという意識を持つことが必要であろう。

二点目として，前章で述べたように，協力用図書は3ヶ月毎に入れ替えを行っている。本の内容を新鮮味のあるものに保つために，定期的に入れ替えを行うことは大変効果的で，3ヶ月という期間も適当であると思われる。ただ，毎回同じリストから選書していると，はじめは面白そうな本が揃うが，何度も入れ替えを繰り返すうちに次第に利用者の興味を引く本が少なくなって来るという問題があり，利用冊数が年々低下傾向にあるのもこれが一因と考えられる。現在，医学図書館は幸いにも県内4つの公共図書館から，それぞれから異なった本を借りることができる大変恵まれた状況にある。それでも，長期間にわたって協力用図書の提供を続けてゆくには，選書する際に今後借受ける本のことも見越して本を選んだり，公共図書館側に依頼して選書のリストの内容を入れ替えてもらうなど，書架の内容を新鮮に保つための工夫が必然的に必要になってくると考えられる。

また，協力用図書の管理にかける職員の手間の問題がある。貸出・返却は前述のようにエクセル表で管理し

ており，それほどの手間はかからない。しかし３ヶ月おきに４つの図書館から資料の選定を行い，受入れ，返却分の内容をチェックし未返却の利用者に督促を行うなどの作業には担当者に相応の負担がかかる。大学図書館の職員数が削減されつつある中で，これらの業務にどれだけの労力を割けるか，通常の業務とのバランスの中で考えてゆく必要があろう。

2）協力用図書の意義

ここまで述べてきたような問題点にも関わらず，協力用図書にある程度の意義があると著者らが考える理由を，以下に二点述べておく。

太田美幸は鳥取県立図書館のサービスについて述べた論文の中で，同図書館が情報を求めてやってくる学習者に対する支援にとどまらず，より積極的に本を読むことの効用を広く伝えることにより，潜在的なニーズを掘り起こそうと努力している点を評価している[5]。大学図書館においてもこれと同様に，とくに学生らに対してはその知識欲を刺激し，彼らが読書をするように仕向けて行く仕掛けを積極的に作り出すことが必要であると考えられるが，協力用図書はこうしたサービスの一環となり得る。これが一点目である。

次に，近年の図書館では「長時間滞在型」[6]，「図書館のアメニティ」[7]といった言葉で，利用者への資料提供に加え，人が集まり，心地よく時間をすごすことのできる空間としての機能が注目されている。大学図書館の資料は学術的な専門書が中心であるが，とくに医学図書館のような専門分野の図書館においてはその傾向が一層顕著で，それが一面堅苦しい印象を利用者に与えかねない。しかし，その一角に流行作家の小説類が置かれることにより，いくらかでもそうした空気をやわらげる効果が期待できる。大学図書館は，学生が在学中に授業の準備や試験勉強で少なからぬ時間を過ごす場所であり，勉強の合間でときにはほっと一息つける，なごみの時間も持ってもらいたいと思っている。実際，本を借りることはなくとも，カウンターを訪れた学生が，ふと協力用図書の前で足をとめて書架を眺めたり，その中の一冊を取り出して見入っている様子をよく見かける。こうした一種のアメニティ向上という点からも，協力用図書の提供は有効な手段と考えられる。

このような利用者のアメニティに資する本を，医学図書館が自前で購入する可能性も考えられるが，先に述べたように現在の予算的状況や，また保存スペースのことを考えてもその冊数は限られたものにならざるを得ない。また，医学図書館はその役割上，まず医学関係の資料をできるだけ多く購入し保存することが大学からも地域社会からも求められ，多くの公共図書館に置いてあるような資料を購入し保存するのは現実的ではない。公共図書館から本を借受け，定期的に中身を入れ替えることにより，大学側は限られたスペースを使って，長期間保存する必要のない本を多くの種類利用者に提供することができ，この点からも，まとまった冊数の本を公共図書館から借受けるという手法は大変効果的である。これらの利点から，医学図書館の協力用図書の試みは，他の大学図書館，とりわけ専門領域の大学図書館と，公共図書館との連携事業のモデルケースになる可能性もあると思われる。

今回の調査で，漠然としたイメージにとどまっていた協力用図書の利用の実態を，ある程度はっきりとした数字で示すことができた。この結果を今後のサービス継続の中で活かしてゆきたい。

なお，今回利用した統計は石田園子前医学情報係長（現学術情報担当主任司書）をはじめ，医学図書館の全職員によって地道に蓄積された記録がもとになっている。協力用図書をお借りしている鳥取県立図書館，米子市立図書館，境港市民図書館，南部町立図書館の各位，また，貴重な助言をいただいた橋井嘉枝子主任司書，山岡聡子氏と医学図書館の職員の皆様には，この場をかりて謝意を表したい。

＜注＞

[1] それらの経緯と概要については既に次の3つの論文がまとめられている。白木俊男，森田正「鳥取大学附属図書館における社会貢献の現状：県内図書館との連携」『大学図書館研究』76, 2006.3, pp.54-61　森田正「鳥取大学附属図書館と県内図書館ネットワーク」『図書館雑誌』100(5), 2006, pp.276-277　石田園子「地域貢献の現状：鳥取大学附属図書館の場合」『医学図書館』53(4), 2006, pp.404-409

[2]「協力用図書」の名称はもともと鳥取県立図書館の行っていた一括貸出しサービスの名称であったが、医学図書館ではそれ以外の公共図書館から借受けた図書についてもこの名称を使っているため、本稿では公共図書館からまとめて借受けた図書について、すべてこの名称を使用した。

[3] 石田，前掲 p.405

[4]『鳥取大学附属図書館報 ：Library』112, 2008.10, p.8　例えば平成19年は県立図書館に4冊の貸出を行ったのみで、米子市立図書館、境港市民図書館、南部町立図書館への貸出しは0件であった。

[5] 太田美幸「生涯学習の資源としての図書館：鳥取県立図書館の先駆的取り組み」『鳥取大学生涯教育総合センター紀要』4, 2008.1, p.87

[6] 程野真人，田戸義彦「開架室をつくるために考えたこと」『現代の図書館』38 (1), 2000.3, p.232

[7] 平湯文夫「利用したくなる情報空間をめざして：図書館の家具とレイアウト」『情報の科学と技術』52(1), 2002, p.4

表1　協力用図書借受け冊数

H18年度	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月	合計
鳥取県立図書館	192	160	180	192	724
米子市立図書館	100	100	100	102	402
境港市民図書館	50	50	51	55	206
H19年度	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月	合計
鳥取県立図書館	132	174	167	90	563
米子市立図書館	100	100	100	100	400
境港市民図書館	55	61	53	50	219
南部町立図書館	44	44	43	43	174
H20年度	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月	合計
鳥取県立図書館	110	247	－	－	357
米子市立図書館	0	97	－	－	97
境港市民図書館	50	53	－	－	103
南部町立図書館	51	79	－	－	130

表2　平成17年度～平成20年度の協力用図書利用冊数推移

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
平成17年度	94	67	85	58	31	99	112	105	92	120	159	114	1136
平成18年度	110	86	121	93	76	41	94	80	238	65	135	59	1198
平成19年度	80	89	47	61	45	66	62	102	37	40	59	0	688
平成20年度	53	34	23	43	62	27							242

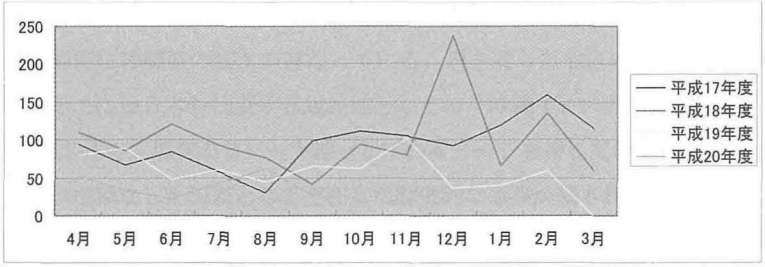

表3　借受け図書館別の協力用図書回転率

	H18年度			H19年度			H20年度		
	借受冊数	利用冊数	回転率	借受冊数	利用冊数	回転率	借受冊数	利用冊数	回転率
鳥取県立図書館	724	621	0.85773	563	224	0.39787	357	90	0.2521
米子市立図書館	402	453	1.12687	400	217	0.5425	97	32	0.3299
境港市民図書館	206	124	0.60194	219	108	0.49315	103	60	0.58252
南部町立図書館	0	0	0	174	139	0.79885	130	60	0.46154
合計	1332	1198	0.8994	1356	688	0.50737	687	242	0.35226

表4　協力用図書利用者の所属・身分

	平成19年 4月～9月	平成20年 4月～9月
保健学科	45	42
医学科	28	22
生命科学科	29	10
院生	10	2
教員	7	9
事務・技術職員	131	66
合計	250	151

表5　協力用図書利用学生の入学年

平成20年4～9月

入学年	人数
2003	2
2004	15
2005	17
2006	28
2007	12
2008	0
合計	74

平成19年4～9月

入学年	人数
2002	2
2003	6
2004	54
2005	30
2006	11
2007	0
合計	103

END